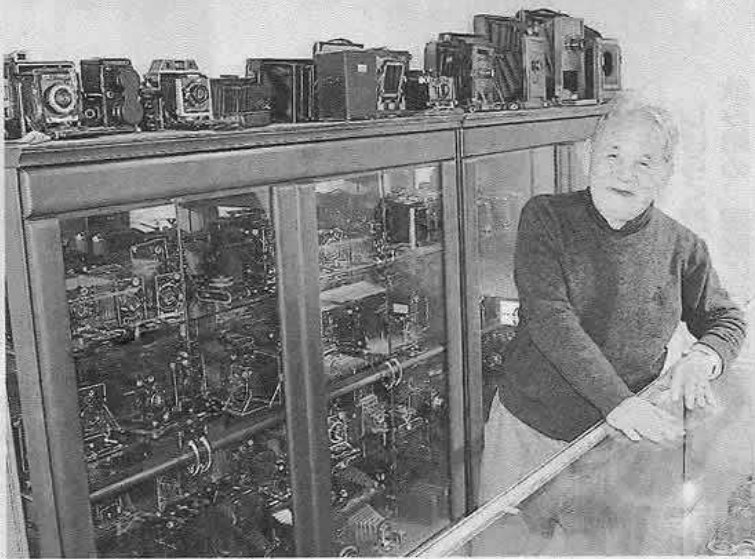


コレクター魂 本に結実

カメラ400台、蓄音機100台 変遷など紹介

「昔恋しい 銀座の柳」。昭和の初めに製造された蓄音機から流れる「東京行進曲」。東村山市の仲清さん(95)は、柔らかな表情で、使い捨ての鉄針が拾う蓄音機の音に耳を傾けた。自宅離れのコレクションハウスには、おびただしい数のアンティークカメラと蓄音機が並ぶ。その数、カメラ400台、蓄音機100台。今春、膨大なコレクションをまとめた書籍を自費出版した。



仲清さんの膨大なアンティークカメラを収めたコレクションハウスの一室。東村山市

東村山の仲さん 95歳

戦前から、ドイツのメーカー「ローライ」の二眼レフに憧れていた。しかし、「中古でも、とても手が届く値段ではありませんでした」。50歳を過ぎ、趣味にお金をかけられるようになってから、アメリカからカメラの個人輸入を始めた。

戦前から、ドイツのメーカー「ローライ」の二眼レフに憧れていた。しかし、「中古でも、とても手が届く値段ではありませんでした」。50歳を過ぎ、趣味にお金をかけられるようになってから、アメリカからカメラの個人輸入を始めた。



コレクションをまとめた著書「写真機と蓄音機」

通産省(現経産省)の技官を退職してからは、生来のコレクター魂と熱中癖に火が付く。アンティークカメラに投じた費用は「よく分からなけれど、1千万から2千万円くらいですね」。80歳を過ぎからは蓄音機の収集にも乗り出し、こちらは「数百万円でしょうか」。自宅の離れから長男の滋さん(66)を追い出し、コレクションハウスにしてみました。「凝り性で、やり出したら周りが何を言っても無駄ですから」と滋さん。

サイドボードほどの大きさがある、仲さん自慢の蓄音機「ビクトロラ・クレデンザ」から流れる、佐藤千夜子の「東京行進曲」。90年前の機械が奏でているとは思えない、クリアな大音量に驚く。仲さんは、「懐かしさと感動が全身を駆け巡る」と語る。

でも、「せがれは、カメラも蓄音機も私ほどは関心がない。コレクションが散逸する前に、きちんと残したかった」と、自費出版で「写真機と蓄音機 マイコレクションから」(円窓社刊、1800円)を執筆。膨大なコレクションから約半数を写真に収め、技術の変遷や各機種の特徴、時代背景などをまとめた。

「もう気力がないので、集めるのはやめました」と仲さん。一日中、コレクションハウスで若き日の夢たちに囲まれ、きょうはあのカメラ、明日はあの蓄音機を修理したり、整備したりして過ごしている。(抜井規泰)